

世界自然遺産のまち知床・斜里町に根付く 文化的価値の継承と創出を目指す芸術祭

あし
葦の芸術原野祭実行委員会

【葦の芸術原野祭について】

葦の芸術原野祭（以下、「あしげい」）は、北海道斜里町内外の表現者と地域住民が垣根を越えて、企画と運営、創作と発表を一体的に行う有志の芸術祭です。あしげいは2021年に始まり、2024年まで4年連続の開催を続けてきました。地域に根ざす芸術祭として、私たちは初年度から継続開催を目標に掲げています。

本稿は、あしげいが目指す三つの理念をもとに、これまでの活動を紹介します。

1 固有性 ～知床の声を語り継ぐ～

世界自然遺産として知られる知床半島ですが、その文化的側面はあまり知られていません。知床・斜里町にはかつてより人々の暮らしがあり、海洋漁猟を生業としたオホーツク文化、アイヌの文化、開拓の歴史など、厳しくも雄大な風土のなかで培われた文化的な価値が根付いています。私たちは、このような土地の歴史と文化に敬意を持ち、その固有性を大切にしています。

あしげいの会場となるのは、この町のシンボルとして100年近く人々に愛されてきた「斜里町 旧役場庁舎＝旧図書館」です。この建物は、斜里の中核機能を果たしながら町の発展とともにその役割を変えてきました。1968年に現在の役場庁舎が新設されてからは、一階が町立図書館、二階は郷土資料館として、知床の貴重な資料を蓄積する知の中核として、閉館する2014年9月まで機能していました。その後は、老朽化により利用されずにいた建物でしたが、芸術文化の場として活用することで、再びこの場所に老若男女が集い、地域の記憶や想いが循環する場となっています。

あしげいのメインプログラムの一つである「おもいでうろうろプロジェクト」は、空っぽの本棚が立ち並ぶ「斜里町旧役場庁舎＝旧図書館」を大きな樹洞*に見立て、来場者が持ち寄った「思い出の品」を展示する参加型の企画です。4年間の芸術祭を通して、500点を超える人々の思い出が会場に展示されてきました。

思い出の品は、樺太引揚げ者が描いた当時の市街地図のように歴史あるものから、小学生がダンボール

で工作したお父さんのトラクターのように身近な地域生活を想像できるものまで多岐にわたります。これらは、大きな歴史には残らない地域史や個人史の断片であり、そ



小学5年生の工作「お父さんのトラクター」

の一つひとつが地域の固有性を形成するものであるといえます。思い出の品は、出品者による手書きの解説カードとともに会期中の会場に展示されたのち、芸術祭のアーカイブブックに記録されています。



樺太引揚げ者が中学生時代に作成した地図

2 対等性

～表現者は生活のなかへ、生活者は表現のなかへ～

あしげいは、「地元出身者」、「移住者」、「地域外の滞在者」と、立場の異なる三者が共同で企画運営を行いながら表現の場を作り上げています。また、「アーティストと地域住民」、「表現者と鑑賞者」、「地元と部外者」といった対立的に捉えられがちな観念をときほぐし、対等な関係性を形成していくことが、あしげいの二つ目の理念です。

作品展示では、地域在住のアーティストと都市部からの滞在アーティスト複数人が対話を重ねながら創作を行い、絵画や立体など、多様な作品で展示空間を共創しました。また、アーティスト自身が積極的に会場案内や作品解説を行い、来場者との交流を深めるなかで、相互に刺激を受け合う場が創出されました。

あしげいでは、地域の人々が自発的に表現を披露す

* 木のうろ。樹木の幹や太い枝にできた洞窟状の空間。



展示作家による作品解説ツアーの様子



町内の読み聞かせサークルによる記憶伝承

る場面も生まれています。斜里町内の読み聞かせサークルの方々が、自作の紙芝居を上演することに加え、語り部のように戦時中の記憶や当時の知床の自然などを若者に向けて伝えてくださっています。

このように、アーティストは一過性の巡回展や地方公演に留まらず、長い時間をかけて町の人々との

交流を深め、「生活」のなかへと浸透しています。地域の人々もまた、生まれ育った風土の素晴らしさを再発見するように、「表現」の世界へと踏み込んでいます。三者三様の立場を尊重し、その垣根を越えていくあしげいというフィールドには、「すべての営みが表現である」ことを発露させる可能性が広がっているといえます。

3 連続性 ～新しい表現の地平を拓く～

土地の歴史を継承し、今を生きる多様な表現者によって、今日の文化を築くこと。それがあしげいの三つ目の理念です。知床に残された数々の郷土史や個人の記憶、自然史や民族の歴史。それらは、ガラスケースに収められた過去の遺物ではなく、今を生きる人々に向けて投げられたメッセージであると私たちは受け止めています。「葦の芸術原野祭」という私たちの活動もまた、この土地の「今」を表現する文化の1ページであり、まだ見ぬ未来への橋渡しとなるものです。このような連続性を絶やさず、新たな表現を生み出していくために、私たちは継続的な活動を続けています。

斜里町には、「語り継ぐ女の歴史」という貴重な本があります。1989～2001年にかけて「斜里女性史をつくる会」が編集発行をした、明治・大正生まれの斜里の女性152人の人生の聞き書き集です。この本を題材に、地域在住の小学生から80代までの10名の出演者によるリーディング公演を行いました。開拓の苦楽を生

きた人々の歴史が、今を生きる幅広い年齢の出演者の肉声によって語られ、過去から未来への連続性を喚起させる新たな表現として産声をあげました。

2022年から3年にわたり満員御礼のなか芸術祭のフィナーレを飾っている『葦の波』は、この土地の「今」を表現するあしげいオリジナル公演です。

出演者は、舞台経験の有無やプロ・アマを問わず、芸術祭を通して交流を深めてきた有志によって毎年構成されています。

一人ひとりが知床で培った体験を持ち寄り、群像劇のように無数の場面を描き出す本作は、地域共創を掲げる葦の芸術原野祭を象徴する作品です。芸術祭の継続を通して蓄積された土地の魅力や人々との出会いが舞台上に色濃く反映され、地域に還元されていく本作は、観客さえも表現の場に巻き込みながら、知床の新たな文化芸術を綴る1ページとなっています。

【あしげいのこれから】

葦の芸術原野祭は、翌年、さらにその先へと、継続と発展を目指して動き出しています。地域の過疎化や少子高齢化が危惧されるなか、芸術祭に参加した複数の若者が斜里町に移住するといった事例も生まれてきています。このような可能性を地域に根差しながら育んでいくことが私たちの目指す未来です。

地域文化の再発見と新たな価値の創出を掲げる私たちの活動は、ホームページやSNSで随時発信しています。ぜひご覧いただき、応援いただければ幸いです。



語り継ぐ女の歴史』朗読ワークショップ & 発表会



リジナル公演『葦の波 part 3』



<https://ashigei-artfes.studio.site/>